
ごみ問題とリサイクルに関する仙台市民意識調査

お礼と結果のお知らせ

2000年4月

調査主体：生活環境研究会
(代表：東北大学大学院文学研究科
教授 海野道郎)

先日は、私どもが実施いたしました「ごみ問題とリサイクルに関する仙台市民意識調査」にご協力いただき、まことにありがとうございました。皆様のご理解により、貴重な調査結果を得ることができ、深く感謝しております。

このたび、調査結果のお知らせを作成いたしましたので、ご覧いただければ幸いに存じます。これは、主な項目について結果を要約したものです。ただし、なるべく早く結果をお知らせしたいということから、結果は確定前の速報値を用いておりますので、後ほど一部修正の可能性もあります。今後、さらに調査結果をまとめたあと、詳しい分析を行う予定であります。また、これらの結果に関する記者発表を行う予定であります。

「ごみ問題とリサイクルに関する仙台市民意識調査」について

私ども生活環境研究会では1989年、1991年、1993年に、仙台市において環境問題に関する調査研究を続けてまいりました。今回の調査は環境問題の中でもとくにリサイクルに焦点をあて、1200世帯を対象に2000年2月14日から16日にかけて回収を行ったものです。回答をお寄せいただいた世帯は1026世帯で、回収率は85.5%でした。今までの研究結果の蓄積をふまえつつ、今回の調査を分析することによって、環境問題の解決にむけて、少しでも貢献できればと考えております。

内容をご覧いただくにあたって

- 1) 各グラフの数字は、とくにことわりがない限り、全回答(1026票)に対するパーセントです。ただし、小数点以下は四捨五入しています。また、非常に小さい値(パーセンテージ)は表示していませんので、合計は必ずしも100%にはなりません。
- 2) わからない/答えない(Don't Know / No Answer)回答はのぞいて分析しています。
- 3) 複数回答とある問は、「あてはまるものをいくつでも選んでください」という形式の問です。
- 4) グラフの数値は速報値ですので、他に引用される場合は生活環境研究会までご連絡ください。

1. 調査の概要

ごみ問題とリサイクルに関する仙台市民意識調査

回収期間：2000年2月14日（土）～16日（月）

調査主体：生活環境研究会

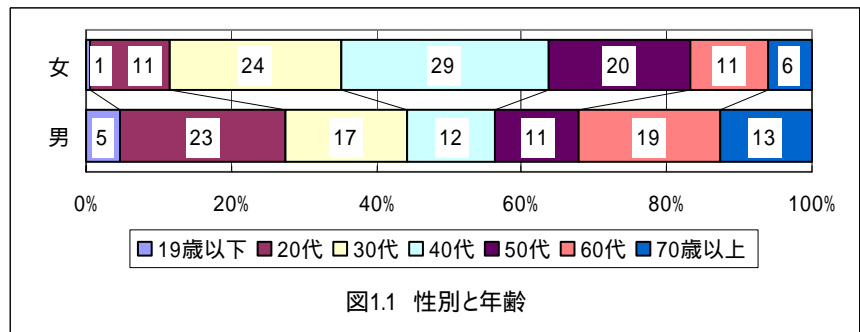
調査対象：仙台市内の1200世帯

回収率：1026票（85.5%）

今回の調査では、仙台市内の約40万世帯のうち1200世帯に回答をお願いしました。対象者の抽出にあたっては、仙台市内の小校区123のうち30校区を選び、その後それぞれの校区ごとに住民基本台帳からくじ引きのような方法（確率比例抽出法）で40世帯を選びました。

1.1 回答者の性別と年齢

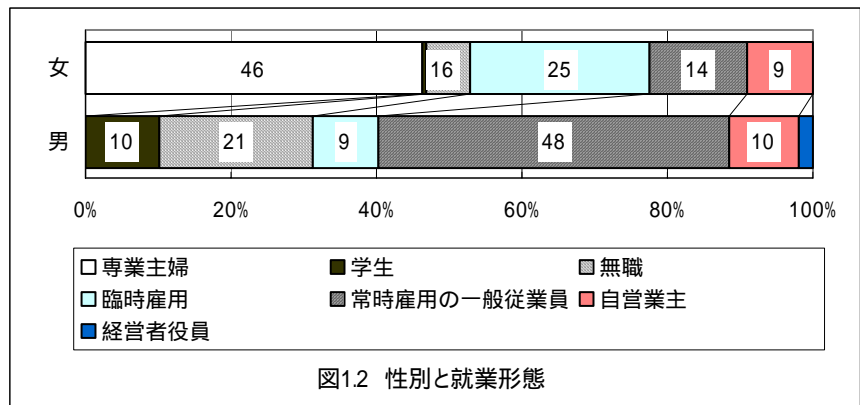
世帯の中で家事を主に担当している方に回答をお願いしたため、回答者の85%が女性、15%が男性となっています。また、年代別に見てみると、20代以下の回答者が全体の15%、30代～40代が50%、50代～60代が30%、70代以上が7%となっています。



性別と年代の両方について見てみると、女性の回答者の約半数は30代から40代が占めています。また、男性では20代がもっとも多くなっています。

1.2 回答者の就業形態

さらに詳しく回答者の特徴を見てみると、女性の回答者の46%が「専業主婦」、25%が「臨時雇用」、14%が「常時雇用されている従業員」の方となっています。また、男性の半数は「常時雇用されている従業員」です。



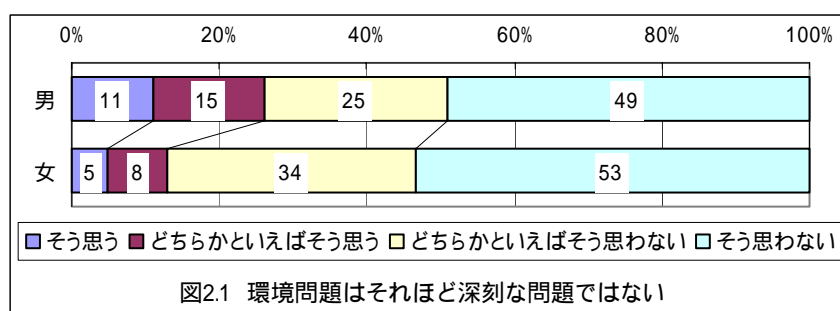
2. 環境問題に対する関心

近年、環境問題に対する取り組みの重要性が新聞やテレビなどのマスコミで指摘されるようになりました。行政や企業、市民の取り組みなども数多く取り上げられています。このような中で、仙台市民は環境問題に対して、どのくらい関心を持っているのでしょうか。

2.1 環境問題の深刻さのとらえ方

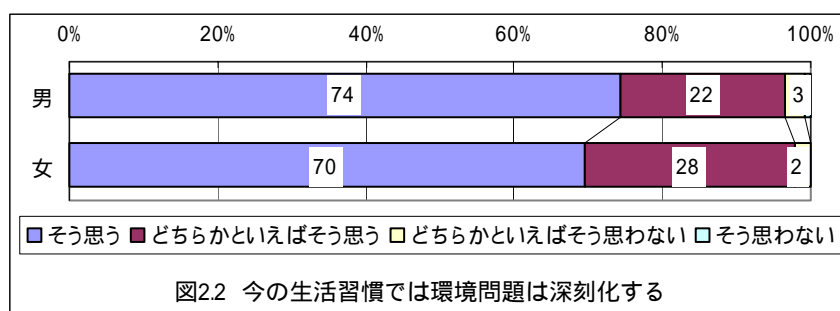
「環境問題はそれほど深刻な問題ではない」と考える人は、「非常にそう思う」、「どちらかといえばそう思う」をあわせると全体の1.5割です。これに対して、環境問題は「深刻な問題である」と考える人は8割以上います。ほとんどの人が、環境問題を深刻な問題としてとらえているといえるでしょう。

このとらえ方が性別によって異なるかどうかを見てみました。その結果、男性の方が、「それほど深刻な問題ではない」と考える人が多いことがわかりました。



2.2 今後の予測

「今の生活習慣では環境問題は深刻化する」と考える人は、全体の7割、また、「どちらかといえばそう思う」と考える人は、全体の3割弱であることが明らかになりました。ほとんどの人が、今のままでは環境問題は深刻になると感じているようです。性別による違いを見てみたところ、男女による違いはほとんど見られず、男女ともに環境問題は深刻化すると考えていることがわかりました。



これらの結果から、仙台市民の多くは、環境問題は現在深刻な問題であり、なおかつ、今の生活習慣を続けていけば、環境問題はより深刻化する一方であると考えているようです。

3 . 環境配慮行動の実行率

3.1 一般的な環境配慮行動の実行率

ほとんどの人が環境問題を深刻な問題としてとらえていることがわかりましたが、人びとは実際にどのくらい環境に配慮した行動に取り組んでいるのでしょうか。19種類の行動について、それぞれの実行率を見ました。8割以上の世帯で取り組まれている行動は、「冷暖房の温度調整」、「使用しない電灯の消灯」といった、省エネにかかわる行動、「ごみ排出のルールを守る」、「排水口にゴミ受けを取り付ける」、「油を排水に捨てない」といった行動でした。これに対して、あまり取り組まれていない行動は、「買い物袋の持参」、「コンポストの使用」、「天然油脂性の洗剤の使用」、「使い捨て商品を買わない」、「環境家計簿」をつけるといった行動でした。

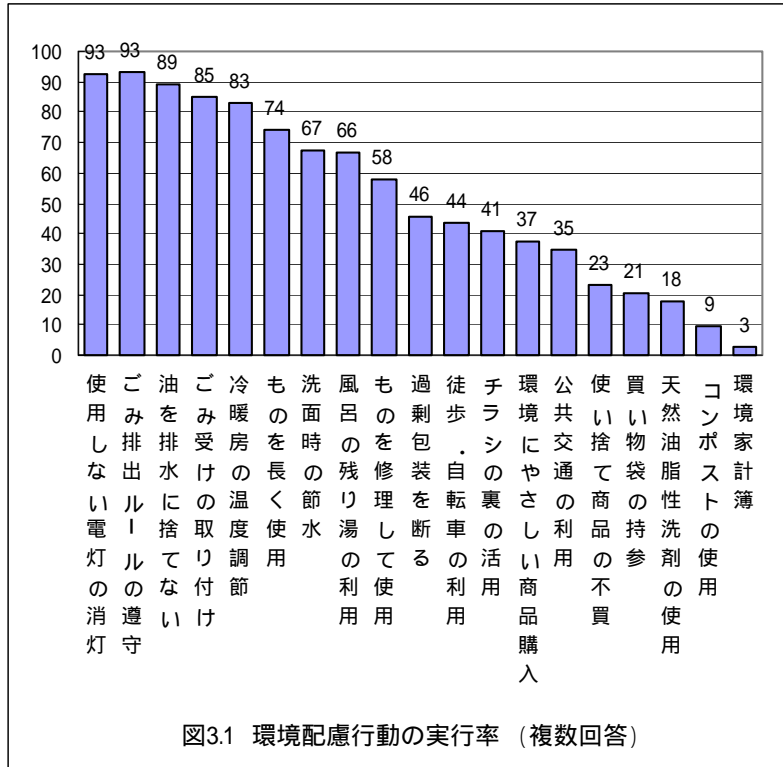


図3.1 環境配慮行動の実行率 (複数回答)

これら19種類の行動にまったく取り組んでいない人は1026人中4人でした。したがって、ほとんどすべての人が何らかの環境配慮行動を実行しているといえるでしょう。

3.2 リサイクル行動の実行率

次に、リサイクル行動について見ていきます。古くから回収ルートのある「新聞紙・古雑誌」、仙台市で回収している「ビン・缶」、「ペットボトル」は7割以上の世帯でいつもリサイクルされています。これに対して、スーパー等で回収が進められている「牛乳パック」、「トレイ」、また、「衣類」のリサイクルをいつもしている人は、まだ少ないようです。

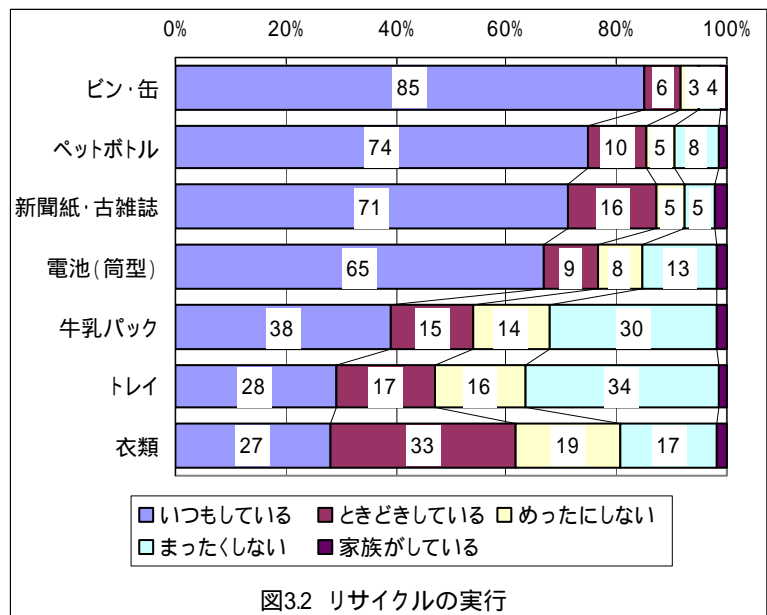


図3.2 リサイクルの実行

3.3 就業形態によるリサイクル実行率の違い

リサイクルの実行には、性別や収入、家族構成など、さまざまな要因がかかわってきます。ここでは、就業形態によって、リサイクル実行率がどのように違うのかということに注目します。

図3.3に就業形態別のリサイクルの実行率を示しました。（就業形態のうち、「経営者（重役）役員」は、人数が少なかったため、分析からのぞいています。）ここでの、リサイクルの実行率は、「いつもしている」、「ときどきしている」と答えた回答者の比率(%)を表しています。

結果を見てみると、「トレイ」をのぞくすべての資源物で、「専業主婦」がもっともリサイクルの実行率が高くなっています。「臨時雇用」、「無職」がそれにつづきますが、その実行率は「専業主婦」とそれほど変わりません。そして、「常時雇用の一般従業員」では実行率が低くなり、「学生」の実行率が最下位となっています。「自営業主」のみは、他の就業形態と実行率のパターンが異なります。「自営業種」の一般的な傾向としては、「臨時雇用」、「無職」よりやや実行率が低いくらいですが、「トレイ」、「ペットボトル」では順位が入れかわります。とくに、「トレイ」では「専業主婦」をぬいて、もっとも高いリサイクル率をしめています。

このような実行率の違いは、家庭内での役割や家事にかかることのできる時間の長さによって説明できるかもしれません。今回の調査では、女性の回答者が多いので、「臨時雇用」の方はパートで働きながら主婦をしているケースが多いと考えられます。「無職」には年金生活者も含まれますので、高齢の方で実際は専業主婦であるケースも多いでしょう。これらのケースでは、家庭内で主婦の役目を果たしているという点で「専業主婦」と共通しています。このために、「専業主婦」、「臨時雇用」、「無職」では、似たようなパターンを示していると考えられます。また、「常時雇用されている一般従業員」は、仕事が忙しく、リサイクルをするだけの時間の余裕がないのかもしれませんが、「学生」はどの資源物でもリサイクル実行率が低くなっています。そのパターンを詳しく見ると、「ビン・缶」、「ペットボトル」などでは他の就業形態の人と比較してリサイクル率の差が小さいのですが、「トレイ」や「牛乳パック」、「衣類」では差が大きくなっています。「トレイ」や「牛乳パック」、「衣類」については、「学生」のひとり暮らしでは、そもそもリサイクルするほどのものがないのかもしれませんが、「自営業主」のリサイクル実行率のパターンが他の就業形態とくらべて特殊である理由は、はっきりとはわかりません。しかし、「自営業主」には、労働時間が長い、自宅と職場とが近い、比較的時間の融通がきくなど、特殊な事情があるので、このような結果になった可能性があります。

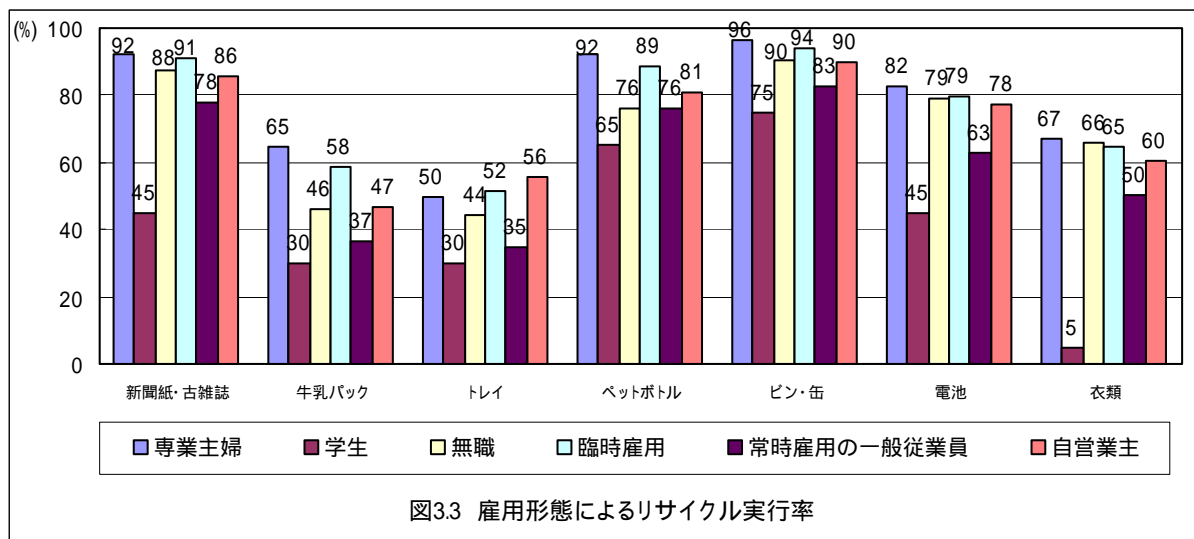
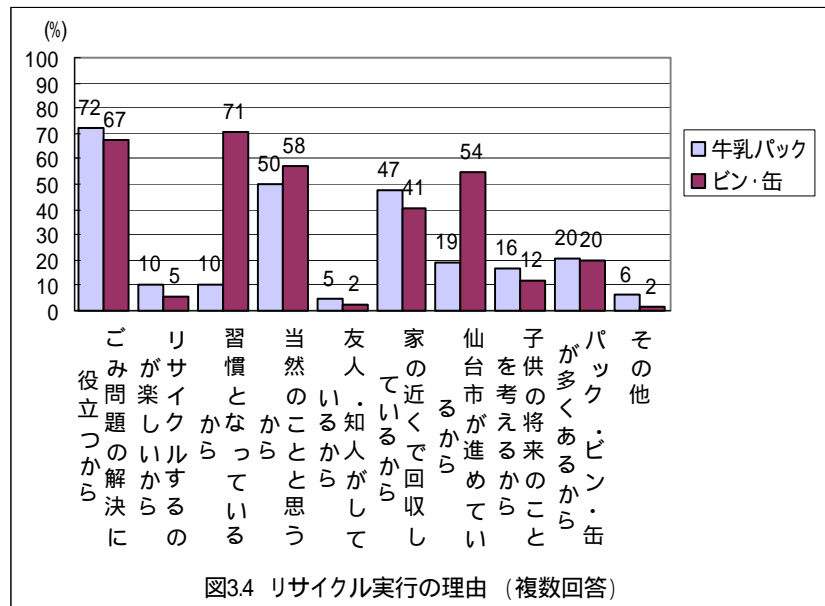


図3.3 雇用形態によるリサイクル実行率

3.4 リサイクル実行の理由

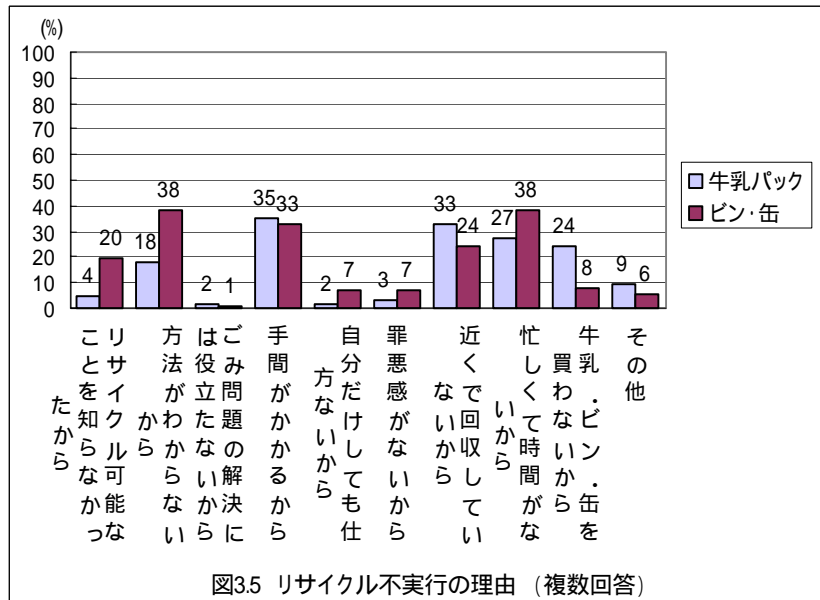
なぜリサイクルをしているのか、なぜリサイクルをしていないのか、それぞれについて、その理由をたずねました。ここでは、いくつかのリサイクルの中でも、「牛乳パックのリサイクル」と「ビン・缶のリサイクル」の2つに焦点をあてています。リサイクルを実行している理由としては、牛乳パック、ビン・缶ともに、「ごみ問題の解決に役立つから」、「当然のことと思うから」という理由をあげた人が半数をこえています。これに



対して、「リサイクルするのが楽しいから」、「友人・知人がしているから」という理由をあげた人はあまりいませんでした。牛乳パックとビン・缶の間で大きな違いがみられるのは、「習慣となっているから」、「仙台市が進めているから」の2項目です。どちらもビン・缶のリサイクルの大きな理由として考えられていることがわかりました。

3.5 リサイクル不実行の理由

リサイクルを実行しない理由としては、牛乳パック、ビン・缶ともに、「手間がかかるから」、「近くで回収していないから」、「忙しくて時間がないから」をあげている人が3割前後います。「ごみ問題の解決には役立たないから」、「自分だけしても仕方がないから」、「罪悪感がないから」という理由をあげる人は、ほとんどいませんでした。ビン・缶のリサイクルを実行しない理由として「リサイクル可能なことを知らなかった」、「方法がわからなかった」をあげている人の中には、仙台市が行っているビン・缶の資源回収がリサイクルであると考えていない人も多少含まれています。



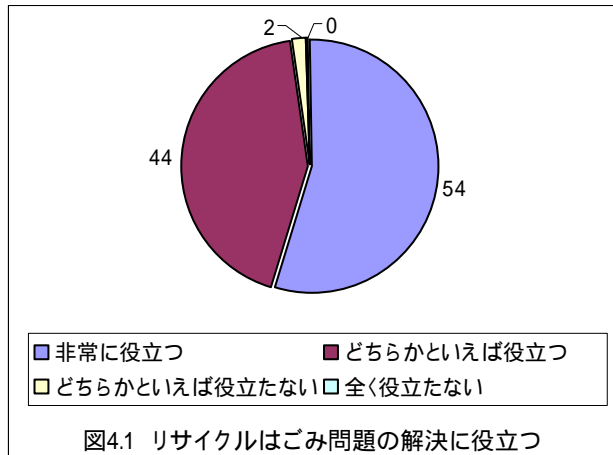
「牛乳パック・ビン・缶を買わないから」という理由をあげている人は牛乳パックに多く、そもそも「牛乳を買わない」、「牛乳はビンで買う」人が少数派ですが存在することがわかりました。また、牛乳パックの「その他」の回答から、家庭内で料理の際に使ったり、ペン立てやいすなどをつくることで、牛乳パックを再使用している人がいることがわかりました。

4. リサイクルにともなう手間・満足感

リサイクルを実行する理由、実行しない理由にはいろいろなものがあることがわかりました。とくに実行しない理由として、手間や時間がかかることをあげている人は少なくないようです。それでは、リサイクルはどのようにとらえられているのでしょうか。

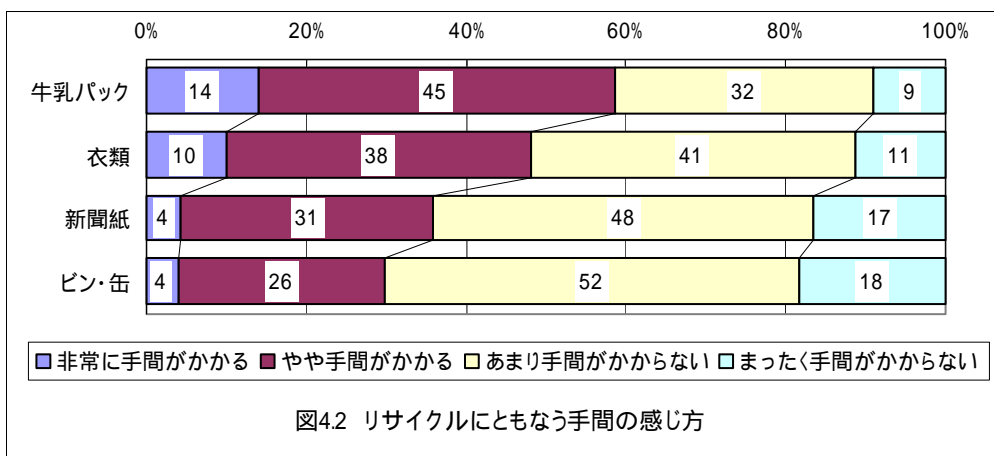
4.1 リサイクルの有効性

「リサイクルはごみ問題の解決に役立つ」と考えているかをたずねたところ、「非常に役立つ」と考えている人が半数以上います。また、「どちらかといえば役立つ」と考えている人も4割以上いることがわかりました。環境問題に対する関心と同じように、ほとんどの人はリサイクルがごみ問題に対して有効であると考えているようです。



4.2 リサイクルにともなう手間の感じ方

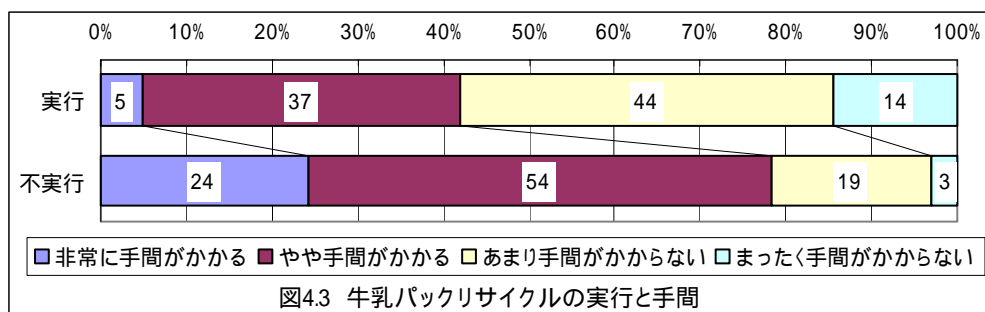
「リサイクルはどのくらい手間がかかる」と感じるかについてたずねたところ、「ビン・缶」、「新聞紙」のリサイクルにともなう手間を感じている人は約3割であることがわかりました。これに対して、「牛乳パック」のリサイクルは、6割の人が「手間がかかる」と感じています。牛乳パックをリサイクルするためには「切って、洗って、乾かす」という作業をしなければならず、また、回収を行っているスーパーなどにまで牛乳パックを持っていくことはかなりの負担になっているようです。



4.3 行動と手間の感じ方

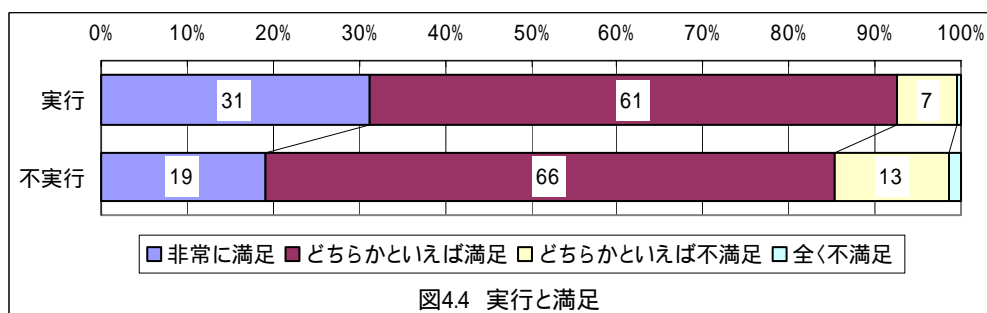
それでは、手間を感じるかどうかは、実際にリサイクルをしている人としていない人で異なるのでしょうか。ここでは、手間がかかると答えた人がもっとも多かった牛乳パックのリサイクルに注目します。牛乳パックのリサイクルを実行している人と、実行していない人、それぞれに関して、リサイクルの手間をどのくらい感じているのかを見てみました。

その結果、実際に牛乳パックをリサイクルしている場合は、「あまり手間がかからない」と感じている人が多いのに対して、リサイクルをしていない場合は、「非常に手間がかかる」、「やや手間がかかる」と答えている人が8割ほどいることが明らかになりました。このことから、実行しない状態のままだと、手間ばかりが大きくなってしまい、ますます取り組みたくなくなるという悪循環におちいつてしまう可能性があります。実際にリサイクルに取り組んでみると意外と手間を感じない、またはリサイクルが習慣化することであまり手間を感じなくなる可能性が考えられます。



4.4 リサイクルにともなう満足感

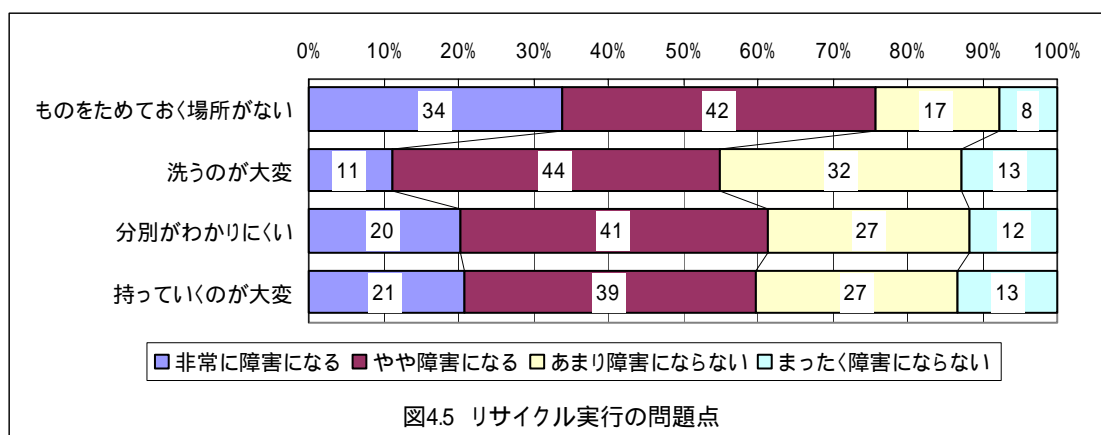
リサイクルには、手間ばかりがともなうのでしょうか。リサイクルをすることで満足感を覚えるかということをつねと、ほとんどの人がリサイクルや節約を行うことで満足感を覚えると考えていることがわかりました。リサイクルには手間をとまいますが、その一方で満足感も覚えるという点がリサイクルの特徴のようです。



4.5 リサイクルにともなう問題点

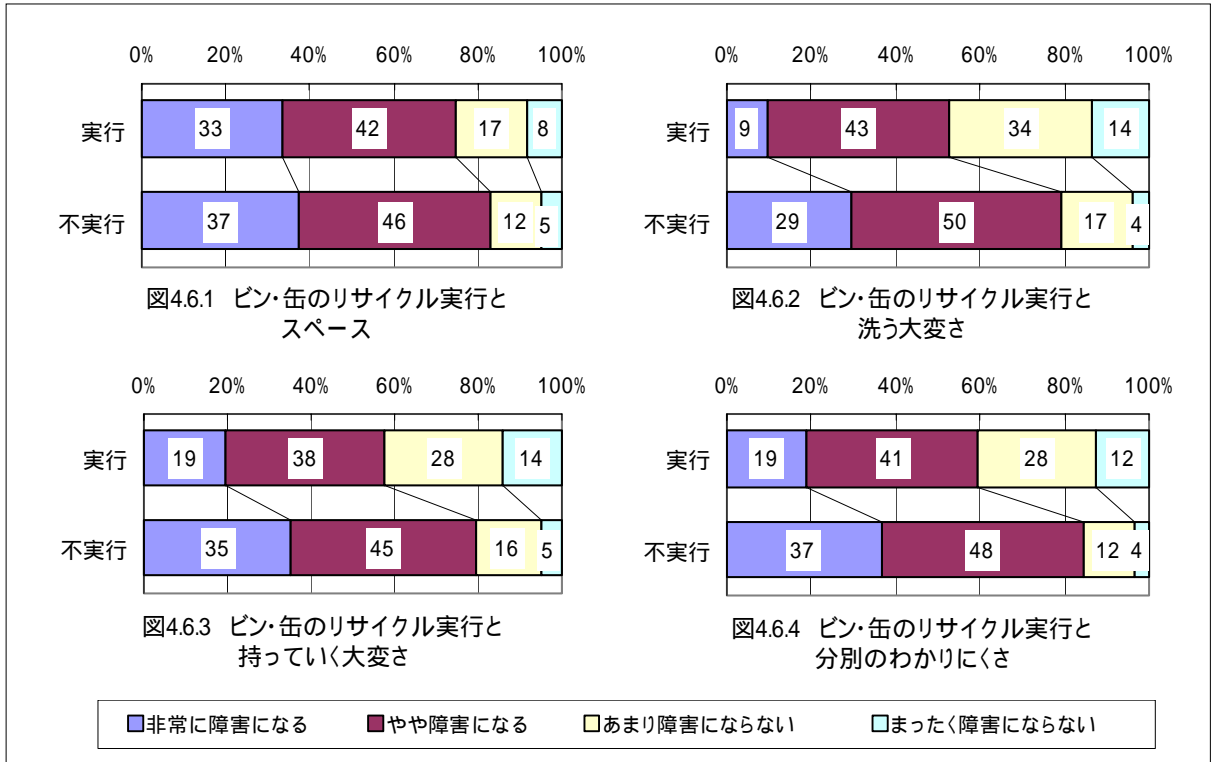
リサイクルはいつでも好きなときにできるわけではありません。回収日が週1回だったり、回収場所が昼間しか利用できないというように、時間などに制約があります。実際にリサイクルするためには、ものをためておく場所があるかといった点も考えなくてはなりません。また、ものによってリサイクルのルールも異なるため、そのルールを知っている必要もあります。こういったスペースやルールの問題は、どのくらい実行の妨げになるのでしょうか。

「ものをためておく場所がない」、「洗うのがたいへん」、「分別がわかりにくい」、「持っていくのがたいへん」ということが実行の障害になると考えている人は、どの問題においても6割前後いることがわかりました。とくに、「ものをためておく場所がない」というスペースの問題が「大きな障害となる」と考えている人は他の問題に比べると非常に多いことがわかります。これに対して、容器を洗うことはほかの問題に比べると、「あまり障害にならない」と考えている人が多いようです。



次に、保存スペースを多くとると考えられるビン・缶のリサイクルについてみてみます。リサイクルを実行している人と実行していない人で、それぞれの問題をどのくらい「障害になる」と感じているかについて比べてみました。その結果、すべての問題において、ビン・缶のリサイクルを実行している人よりも実行していない人のほうが、その問題が障害になると考える傾向にあることがわかりました。とくに、「洗うのがたいへん」、「分別がわかりにくい」、「持っていくのがたいへん」といった問題は、リサイクルを実行している人と比較すると、実行していない人のほうが障害になると考えている傾向が強く出ています。これに対して、「ものをためておく場所がない」という問題は、リサイクルを実行している人としていない人の間の違いはそれほど大きなものではありませんでした。

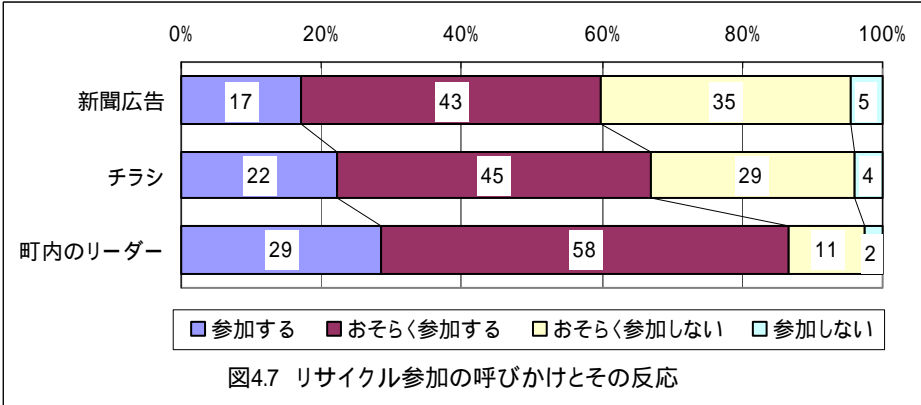
このことから、「洗うのがたいへん」、「分別がわかりにくい」、「持っていくのがたいへん」といった問題は、実際にリサイクルを体験することで解決できるかもしれません。というのは、作業の習慣化から「大変さ」が軽減する可能性や、リサイクルするにつれて知識が増えることから「分別のルールのわかりにくさ」といった問題がなくなる可能性もあるからです。しかし、スペースの問題は、実行している人も「障害になる」と感じている問題です。その大変さは、なかなか簡単には解決できないと考えられます。回収の頻度を多くするなど、スペースの問題が解消できるようなリサイクルの仕組みをつくり、市民の負担を減らすことで、リサイクル行動を促進できる可能性があります。



4.6 リサイクルの参加を促進させる要因

リサイクルに参加するよう市民に呼びかける方法としては、どのようなものが有効でしょうか。「チラシ」によるリサイクル参加の呼びかけ、「新聞広告」によるリサイクル参加の呼びかけ、「町内のリーダー（たとえば町内会長）」によるリサイクル参加の呼びかけの3つの方法で呼びかけられたときに、リサイクルに参加するかどうかをたずねました。その結果、どの方法でも6割以上の人に参加する気持ちがあるという結果になりました。

しかしながら、各方法の影響力は少しずつ異なっているようで、新聞広告よりは、チラシのほうが、チラシよりは町内のリーダーによる呼びかけのほうが、参加する気持ちが強くなるようです。

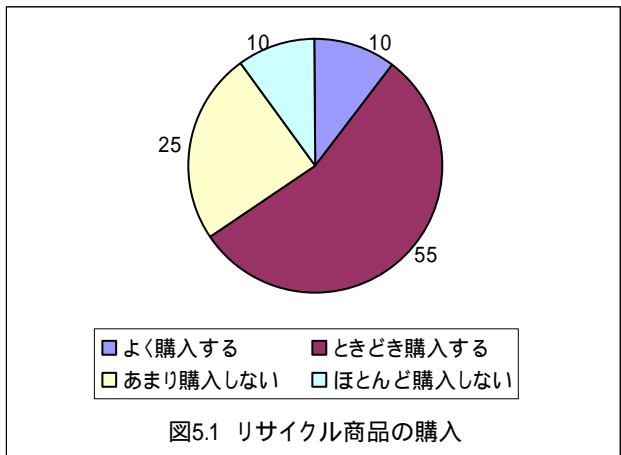


5 . リサイクル商品に対する関心

リサイクルは、資源として出されたものが再生されたあと、再生品が使用され、ものが循環していくことで、はじめてその輪が完成します。たんにリサイクルルートに資源を出すだけでなく、再生されたものを使用することについても、今後は考えていかななくてはなりません。それでは、リサイクル商品は実際にどのくらい購入されているのでしょうか。

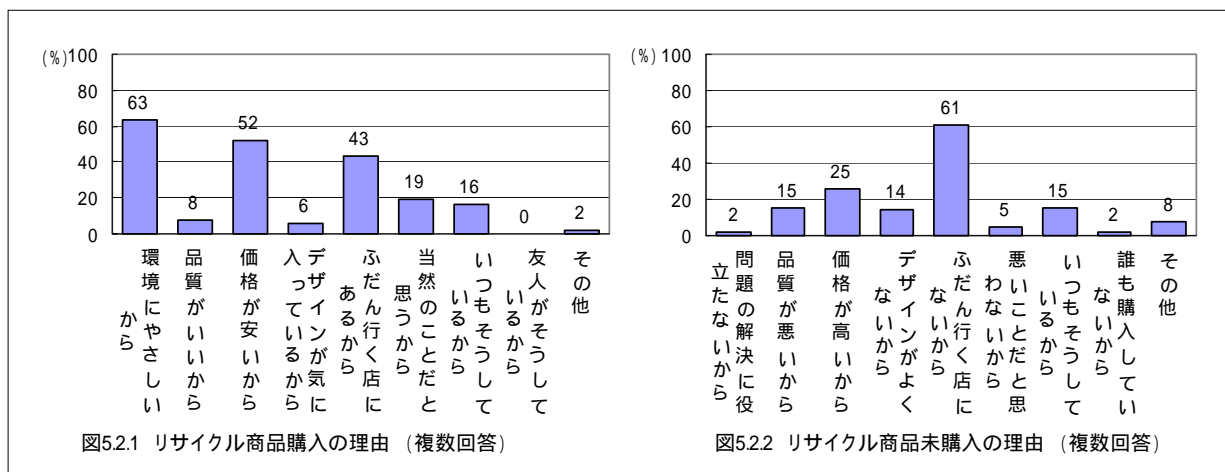
5.1 リサイクル商品の購入

リサイクル商品を「よく購入している」人は全体の1割、「ときどき購入している」人をあわせると6割以上です。これに対して、「あまり購入しない」人は2.5割、「ほとんど購入しない」人は1割となっており、リサイクル商品の購入に消極的な人もいます。



5.2 リサイクル商品の購入、未購入の理由

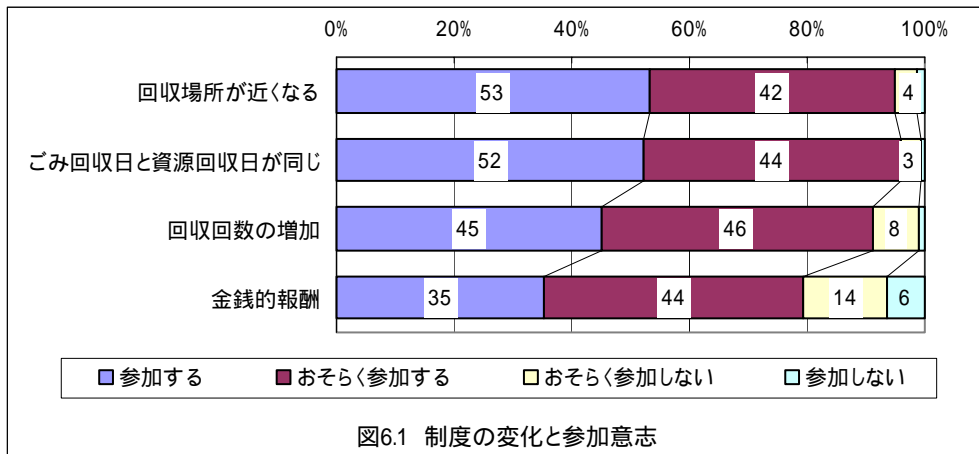
リサイクル商品を購入する理由、購入しない理由、それぞれについてたずねました。リサイクル商品を購入している場合は、「環境にやさしいから」、「価格が安いから」、「ふだん行く店にあるから」という理由をあげている人が多く、「品質がいいから」、「デザインが気に入っているから」、「友人がそうしているから」という理由をあげた人はほとんどいませんでした。これに対して、リサイクル商品を購入していない場合は、「ふだん行く店にないから」という理由をあげている人が6割いることがわかりました。リサイクル商品は、品質やデザインの面ではあまり支持されていませんが、価格が安い場合や、ふだん行く店においてあれば、今後購入される可能性があるといえるでしょう。



6. 未来に向けて

いままで、リサイクルがどのくらい取り組まれているのか、リサイクルにはどのくらい手間がかかるのか、リサイクルをするにあたって何が問題なのか、ということについて見てきました。最後に、リサイクルの制度がどのように変化すれば、市民の参加意志が高くなるのかについて見てみましょう。

「回収場所が近くなる」、「ごみの回収日と資源回収の日が同じになる」というように、リサイクルの制度が変化したならば、リサイクルに参加すると答える人が5割をこえています。「おそらく参加する」と答えた人をあわせると9割以上の方がリサイクルに参加する意志を持っていることがわかりました。また、「回収回数」が増加することで、リサイクルに「参加する」と答えた人も4割以上おり、「おそらく参加する」と答えた人をあわせると、こちらも参加意志を持っている人が9割をこえるという結果になりました。リサイクルへの取り組みを阻んでいる原因として、「手間がかかる」、「ものをためておく場所がない」ということがわかりましたが、「回収場所が近くなる」「回収回数が増える」といった制度の変化は、こういった障害を克服するための方法のひとつとして考えることができるでしょう。



以上の集計によって、リサイクルに対する取り組みの実態や人々のリサイクルのとらえ方などが明らかになりましたが、今後は、環境問題に対する関心と行動の関係や、意識や行動を規定している要因について明らかにしたいと考えております。そのために、人々の意識や行動と、回答者の属性（性別、年齢、職業など）や、社会意識（満足感、公平感、階層帰属意識）の関連を、統計的な分析法（多変量解析法）を用いて分析を行い、リサイクル行動を妨げている要因を制御し、リサイクル行動を促進する要因を探求することで、ごみ問題の解決に何らかの形で貢献したいと考えております。

なお、さらに詳しい調査結果の内容をご覧になりたい方は、下記までご連絡ください。また、今回の調査についてのご感想やご意見・ご希望などがありましたら、お寄せいただければ幸いです。

生活環境研究会では、調査に協力してくださるモニターを募集しています。関心を持たれた方は、下記までお問い合わせください。お手数をおかけしますが、よろしくお願い申し上げます。